

舞い戻れ白光の鷹

ハンマーしゃぶしゃぶ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

グリフィスが女になって逆行もの  
性転換注意

目次

反逆のゴッドハンド	1
また巡り合うその時	21

## 反逆のゴツドハンド

いつからだろう。

手に入れたはずのあいつが、逆にこんなにも強くオレを掌握してしまっただけだ。

「おまえが…オレの運命の支配者だということのか」

ドチュリと胎動する醜悪な肉塊に、美女よりも美しい白光の貴公子は、いつかのように語りかけた。

人の念の海に揺蕩う、生まれし神…魔の現形はただ脈動して己へ刃を向けるゴツドハンドを見つめている。

神の無数の目が、肉塊の隙間から静かに造反者を眺めていた。

『人間という種の本質に従い、我は一人一人の運命を紡ぐ。ただ、それだけだ』

ドチュリ。

そうやって、また肉塊の神が鼓動した。

「神よ。おまえはオレにかつて言った。あるがままにあれ、と」  
白く輝く長い髪をたなびかせて、そのゴツドハンドは音もなく神へと肉薄する。

そして、ゆつくりと、ただゆつくりと手にした刃を肉塊へと突き立てた。

ズブズブと肉に沈む剣が、神の醜悪な肉体を根源から引き裂いていく。

ドチュ、ドチュと肉が蠢き、そして無数の人の念の集合体のそれが、それが叫び声を上げる。

悍ましい悲鳴。

「オレの為す事が、神と人々の願いになるのならば、これもまた願いの結果であり因果律の収束点。そうだろう、イデアよ」

『我を殺すというのか。我を滅ぼすというのか。我を消し去るというのか』

「それがオレの望み。そして…」

おまえの望みなのだ、と音にならぬ声でそう言った。

』!!』

刃が更に深く肉を抉る。

声なき声で神は叫んだ。

ドチュリと脈動する度、肉の隙間から、念を吸い込む巨大な管から、目から、血が吹き出して神がのたうち回る。

のたうち回る肉塊を、酷く冷厳な目で見据えながら、だが最後のゴツドハンドは血の涙を流す。

崩壊していく運命を司る醜き神。

この悍ましい肉が――

「オレは、自由に飛びたい。  
ただ、飛びたいのだ。  
仲間達と共に。  
アイツと共に。  
決して…オレの運命は貴様などに縛られるものではない。  
そうあつてはならない。  
全ては——」

全てはおまえのお陰<sup>せい</sup>だ。  
オレの力では無かった。  
「オレはオレのあるがままに。  
捧げ、転生し…：そしてオレは夢を掴んだ。  
ファルコニアは成った。  
けれど満たされない。  
この飢餓感<sup>けつがく</sup>は、世界の王となっても満ち足りる事はない。  
オレは…：今も渴望<sup>くわい</sup>している」

『おまえは全てを持っている。おまえはあるがままに全てを叶え、掴んだ』

魔<sup>ま</sup>のイデア<sup>イデア</sup>が苦しみながら吐き出したその言葉に、最後のゴツドハン  
ドは、とうの昔に失った筈<sup>はず</sup>の人間性<sup>にんげんせい</sup>を剥き出す。

「違<sup>ちが</sup>う！  
…おまえにオレの事など分からない。  
分かるのは…：…」

このゴッドハンドの脳裏に浮かぶモノ。  
それはいつだってたった一人の人間。  
黒い髪、遅しいあの男。

そして、その直後に決まってアイツらの姿も浮かんでくる。

“鷹の団”

掛け替えのない存在。

新生鷹の団など話にもならない。

新生鷹の団は、真の意味で手駒だった。

消耗品の部下…それ以上ではない。

だが、真の鷹の団は…本当の鷹の団は違った。

彼らは、グリフィスの翼の一枚一枚そのものだった。

国を打ち立て、世界を飲み込み、福音の王となって。

だがそれでも彼の心は満ちなかったのだ。

あれ程に渴望し、手に入れた、夕日に照らされた石畳の向こうに聳える“お城”は、手にしてみればこんなにもちっぽけでつまらないものだった。

侘びてなるものかと、悔いてなるものかと、ここで諦めては死んでいった者達の存在意義すら失われると、そう思って己の白き翼まで捧げて、黒い翼で飛び続けたというのに。

もう心に熱は無かった。

あの頃。

黄金のように輝いた日々。

共に駆け抜けた仲間達。

友。

「人々と魔が共存するファルコニア<sup>理想郷</sup>。オレが思うがままの国。オレだけの国。

……それに何の意味も無かった。

オレの国には、オレが最も居て欲しい奴らがない。

誰もいない。

一人もいないのだ」

唯一、鷹の団で蝕を逃れたリツケルトは、かつては熱心なグリフィス信者だったが、二度目の再開の折、あどけなさを消しつづあったリツケルトに、現人神でありまさに無敵となっていたグリフィスは頬を叩かれた。

それが思い出される。

ガッツを喪失<sup>うし</sup>なった時とは桁は違うし、現人神のグリフィスにはそれは予見できていた事だったが、それでもリツケルトに拒絶されたのはグリフィスにとってショックな出来事だったのだ。

凍りついたゴッドハンド・フェムトの血と魂の奥底に、一点の波紋を投げかけた。

「鷹の団」の仲間達は、それだけグリフィスにとって掛け替えのないモノである証拠だろう。

「おかしいだろう?」

オレはゴッドハンドとなって、オレの望むことは全て叶うようになつたのに。

だが、オレが本当に欲しいモノは、もう永遠に手に入らない。

取り戻せない」

それこそが捧げる道。

人の心を捨て、愛する何かを捧げて至る、人ならざる極地。

「使徒」

それを超え、従える因果に選ばれし「神の手」



彼は気付いてしまった。

全てを思うがままにする事ができる力を持ってしても、もう叶わぬと。

夢を叶えた今だからこそ、失った今だからこそ、本当に大切なものに気付いた。

透き通るような白い頬を血の涙が伝う。

最後のゴッドハンドが今思い出すのは最後の戦いの事。

まさに紆余曲折の果てに、彼はとうとう黒い戦士と再度斬り結ぶ仕儀に至る。

力の差は圧倒的という言葉を持ってしても尚軽い。

その差、遙か尚遠く。

かつての親友など、もう己の心をざわつかせる存在ではないと思っていたのに、なのに。

「グリファイイイスっ!!!」

狂戦士のように猛って、剣と呼ぶには大き過ぎ、そして雑に過ぎる大剣を振って己へ駆けてくる黒い戦士。

ああそんな目でオレを見るな。

その激情の目でオレだけを見つめろ。

グリフィスの心臓の鼓動がどんどんと強くなる。

彼に止めて欲しかった。

彼を殺したかった。

彼に殺されたかった。

彼を蹴りたかった。

彼に憎んでほしかった。

彼が憎い。

彼が愛しい。

たった一人の親友。

たった一人、自分を殺していい男。

この男に憎まれるのは心地良い。

忘れ去られるよりずっと良い。

だが、もはやゴツドハンドたる自分にとって、こんな男は地べたに這いつくばる虫と同じ。

——オレはもはや…超越した——

だから、神の如き力で黒い戦士を薙いだ。

何度も何度もそうしてやろうと思って、その度に、己の意識の外で肉体が勝手にその行為を拒否するかのようになって、だが、超越者としてのプライドでフェムトはどうとうそれを成し遂げた。

広大な範囲の空間が捻じれ、白亜の巨城ごと友を引き裂く。

黒い剣士は……かつての親友は呆気なく胴の大半を喪失し、グシャリと倒れた。

——見ろ。もうオレの心は動かない。死などオレを通り抜ける…  
たとえば、コイツであろうと——

感情なき眼で、もはや物言わぬそいつを眺め、

そして次の瞬間、自然と…無意識にフェムトは彼の首を抱きしめていた。

フェムトの目が冷たく見開かれている。

感情の無い瞳。

虫けらでも見つめるような、己以外の全てを見下す超越者の目。

だが、その目からは止めどなく赤い涙が流れ始めていた。

「……………」

無言のまま、血の涙を流したまま、もはや軀となつてしまった黒髪の友を掻き抱いた。

随分と軽い。

もう、彼の体はちぎれてしまつて、胸から上しか無いからだ。

鬼のような形相で息絶えてしまった彼の、もはや光が宿らない見開いた眼を見つめる。

もう二度と、彼と視線が交わることはない。

その首は、かつて共に駆け抜けた時よりも、黒髪には白いものが多く交じる。

それは数多の、想像を絶する苦勞と、そして彼の生命を蝕んだ呪いと力故だ。

生命と魂を削り続けて、グリフィスの所ここままでまで辿り着いた証。

そうまでして、自分の所に来てくれたという事実には、いつかのよう  
にグリフィスの胸はときめいた。

——オレは——

ドクンツとフェムトの心臓が鳴る。

痛いほどに心臓が強く、速く打って、ゴッドハンドとなつて以来、久しく感じていなかった痛みが心の臓から湧き上がる。

——そうだ、オレは——

ドクン、ドクン。

心臓が痛い。

この痛みは、心臓か。

あるいは、依代とした、友とかつての部下の女との間に出来た魔の胎児が、親の死を悲しんでいるのか。

心が張り裂ける。

張り裂けていく。

張り裂けるのは、フェムトか、グリフィスか、魔の胎児か。  
誰の心だ。

——オレはっ——

心が張り裂けていく。

失ってから気づく。

人は何時だって失くしてから気づくのだ。

もう二度と、過ぎ去って、神様でもどうしようもなくなって初めて知る。

本当の幸福。

本当に大切なもの。

「オレは…」

かつて捧げた時、大切な仲間達の死が温度も無くグリフィスの魂を通り抜けていったのに、もう死は通り抜けず、彼の魂の一番奥深くで揺蕩っている。

フェムトの心が張り裂けて、グリフィスの心に死が染みってくる。

ガッツの死だ。

この痛みはガッツの死。

「ただ、おまえに、隣にいて……」

そう呟いて、グリフィスの両の眼からは、蝕の時にべへリットがそうするように、世のあらゆる悲しみを宿して絶望の涙に濡れた。それでも足りない。

世の全ての悲しみと怒りと憎しみを以ってしても足りない。

ガッツの死は、世界の死を上回った。

グリフィスにとって世界は、ガッツだった。彼と出会ったあの時から世界はガッツになった。だからだ。

暗黒の時代を導く、闇の白き鷹は、自分の爪でもってその暗黒を切り裂き、終わらせる。

世界を終わらせる。

現世と幽界が交わりし幻造世界も、彼が導いた暗黒の時代も、罪深き黒き羊達も、盲目の白き羊達も、何もかを導いてやる。終わりへと導いてやる。

ガッツ亡き世界にどれほどの価値がある。

ガッツの首を抱いて血の涙を流し続けるグリフィスの下に、因果の道は開き、そして魔に携わった者を迎え入れようと、死者渦巻く地獄の門が開く。

門から伸びる死者の群れは、寄り集まって一本の死の道になってその細く醜い死者の腕をガッツの首へと伸ばした。

(触れるな……汚い手で、オレのガッツモに触れるな……！)

グリフィスがゴッドハンドの力を地獄へと向ける。憎い。

この因果の全てが憎かった。

自分を渴望の福王と仕立て上げる為に、自分とガッツを殺し合わせた運命が憎い。

そういう歯車をせつせと拵えた神が憎い。

その神の意志を代弁するかのゴッドハンド共。使徒。

——憎い——

——オレからガッツを奪ったものが憎い——

——オレの夢の為に、仲間を捧げたオレそのものが憎い——

許せない。

魔のアイデアが許せない。

ゴッドハンドが憎い。

運命が、因果が憎い。

何よりも、その運命に囚われ、神の意志通りに動き回って転げ回って、超越者を気取っていた自分が一番憎い。

仲間を殺し、陵辱し、友をオレに殺させたオレが憎い。

「——あるがままに」

そうだ、あるがままに。

グリフィスの心に、あるがままに。

(オレの、今やろうとしているコレもまた、貴様の望むがままなのだろう、アイデアよ)

鷹は飛んだ。

自分からガッツを奪おうとする地獄の門<sup>渦</sup>を一刀の下に切り裂き、幽幻の世界を飛び、そして思うがままに他のゴッドハンドを手に掛けた。

ゴッドハンドとゴッドハンドの戦いは筆舌に尽くし難いものだったが、世界全てを破壊せしめんとする並々ならぬ意志は同じゴッドハンドと言えど他の四人を圧倒した。

そして、神の手の四つの指は手折られる事になる。

光の鷹は<sup>白</sup>グリフイス<sup>鷹</sup>となつて魔<sup>神</sup>のアイデアに反逆したのだ。  
思うがままに。  
あるがままに。

『!!!』

肉塊に深く深く突き立てた剣を振り上げた。  
アイデアが両断され、人の歴史の開闢以来降り積もった人の醜き念が  
グリフイスによって破壊されていく。

「これもまた、おまえの望み」

『』

神の肉が崩れていく。  
血を噴き上げて、断末魔を上げて、何千何万という目から血を垂れ  
流して屑けていく。

もはや声も発せなくなる程に力を急速に失う神。

崩れていく神の肉体から垂れ流れる“力”は、グリフイスの丹精な  
唇へと吸われて、ゴッドハンドの体内へと吸い込まれていった。

「もうオレは、おまえの導きなどいらぬ。」

オレはオレのまま飛び続け…そしておまえはこのまま消える。

貴様の望み通りに。

そして、貴様の力を喰らい…オレは…——」

ガッツの首を抱くグリフイスの腕の力が強まる。

もう二度と彼を放すまいとするように。

出来ぬことはない。

今のグリフイスには出来ぬことはないのだ。

魔のアイデアを切り裂いて、その力を取り込んだグリフイスならば。



「ガッツ」

神を喰らいし光の鷹は、その翼を思うがままに広げる。

もう、その者を止める事は誰にも出来ない。

鷹の心にはガッツの姿を、温もりを、声を渴望する飢えだけが無限に広がっていた。



「バズーソだ!!! 灰色の騎士」のバズーソ…!!」

兵達がざわつく。

その巨漢の騎士は恐ろしい戦士としてここらでは名を馳せる剛の者であった。

ミッドランドとチューダーの1000年戦争。

その中では取るに足らない、些細な局地戦。

その者はこれをずっと待っていたのだ。

鷹の嘴のように鋭く湾曲したフェイスガードをした兜を被る美しいその騎士は、味方であるバズーソと激しく斬り結ぶ一人の男を食い入るように見つめていた。

「へえ、敵さんにもすげえのがあるんだな」

隣に立つ部下が呑気に言うが、部下の言葉など耳に入っていない。

「あんたとどっちが強いかな?」

「バーカ、次元が違うよ。なあ、グリフィス……グリフィス?」

??お、おい大丈夫か?」

頼れる団長の様子がおかしいことに部下は気づく。

ふるふると震えていた。

「お、おい、調子がおかしいのか？」

こりややべえ、どっちにしるもうこの城はダメなんだ！はやいところズラかろう！」

「…いや、大丈夫だ」

滾る心、逸る心を抑えて、グリフィスは自制し、そしていつものように部下を落ち着かせる。

「キヤスカに撤収作業を急がせて」

そして、美しく柔らかなソプラノの声で部下に告げれば、その部下は喜んで駆けていくのだ。

「へへっ、鷹の団最強の紅二点の間で伝令できるなんて幸せってね！」  
駆けていく部下の背を見送ってから、グリフィスは城壁の上から眼下に広がる城内中庭へ視線をやる。

そして見た。

熱の籠もった目で、バズーソを斬り殺した若き黒髪の戦士だけを。鎧兜越しでは我慢ならない。

グリフィスは焦るように慌てるように兜を筆り取って、そして開けた視界で彼だけを見つめる。

鷹の兜からまろび出た長い銀髪。

切れ長の美しい瞳。

淡麗な鼻筋。

細い顎。

戦場だというのに、ふわりといい匂いさえ漂って、鎧を持ち上げる胸の膨らみは、崇拜と畏敬の念を抱く部下たちさえ劣情を一瞬抱いてしまう程に艶めかしい。

瑞々しい色香漂う唇から漏れる熱い溜息が、また一層、グリフィスの色気を倍増させた。

「ぐ、ぐくくり」

「…相変わらず、グリフィス団長…美しいぜ…！」

「美しいだけじゃねえ、グリフィス団長とキヤスカの姉御は、女だって

「いうのにどんな男にも負けねえ最強の騎士！」

「そうそう！しかもグリフィス団長は天才戦術家でもあるしな！」

小声で好き勝手に部下達が和気あいあいとしているが、そんな言葉すら今のグリフィスには聞こえていないのだ。

「なあ、おまえって団長とキャスカ千人長…どっちがタイプだ？」

「へへへ、そりゃ、おめえ…どっちも違った風情があるつてもんよ」

「たしかになあ。キャスカの方はこう、ムチツとしててボーイッシュユ  
で…」

「団長の方はスラツとしてて、まるで御伽話の妖精<sup>エルフ</sup>みてえで超美人だしなあ」

「おれは団長だな」

「うんうん、そうだよな。おれも」

「まー、団長はミッドランド一の美貌を…——つて、あれ!？」

「団長!?!速く撤退しましょうよ!！」

先程の位置から全く動かず、ただひたすら一点を見つめ続けるグリフィスに気付いて、慌てて部下達は引き返してくる。

「…ええそうね。焦ることはない。もう、目の前なのだから…」

眩くグリフィスに思わず部下は突っ込む。

「いや焦りましょうよ!?!」

「敵が目の前なんですからね!?!」

戦乙女とも謳われる最強の女騎士グリフィスは、後々も、ガッツと関わりと冷静さを失ったり天然ボケを發揮したりするのは有名だが、その気配はすでにここからしていたのだった。

運命の歯車は回り続ける。

だが、今生ではその歯車を回し、糸を紡ぐのはグリフィスその人。そこに魔のアイデアの介在は存在しない。

あの時のように。

あの頃のように。

戦勝に湧く貴族の宴を後にし、独りガッツは草原を歩き、また次の戦場へと向かう所にコルカスが仕掛けた。

懐かしい、とすらグリフィスに思わせる展開の数々。

懐かしさがこみ上げ、自然な笑みを維持するのも難しいぐらいにグリフィスの心は高揚する。

ガッツの報奨金目当てのコルカスが部下共々痛い目を見て、そしてその尻拭いに、やはりかつてのようにキヤスカを……向かわせる事をせずに最初から己が赴き、そしてガッツの意識を刈り取って自分の寝床へと運ばせた。

(そう……これでいい。)

そもそも、キヤスカを最初にあいつに接触させたのがオレの第一の失敗だった。

私はもう失敗しない。

私からガッツを奪ったキヤスカ。キヤスカの存在が、ガッツを惑わせた。

……だからといって、キヤスカも鷹の団も私のモノだから……

だからおまえを殺しはしないよ、キヤスカ。

おまえは私の鷹宝箱の団の中で転がっていればいい。

何もせず、ガッツの魅力に気づかず、おとなしく)

「こいつは血を失い過ぎている。

血を失った男に温もりを与えるのは女の役目。

私がやる。こいつが血を失い過ぎたのも、私のせいだから」

気絶するガッツに対してこんな事をいきなり言い出したものだから、鷹の団の者達は皆、まるで片想いの人に既に恋人がいたかのような、そんな衝撃を受けて固まった。

男共が固まる中で、唯一人キヤスカだけが意識を再起動させる。

「グリフィスがそんな事する必要ない！」

わ、私がやる！」

「なぜキヤスカが？」

なぜおまえがしやしやり出る——

誰にも聞こえない声でグリフィスは呟く。

「っ」

なぜ、と言ったグリフィスの目は無表情に見開かれ、そして鷹のように鋭い視線となってキヤスカを見抜いた。

思わずキヤスカが怖気づく程の、そんな目。

「だ、だって…グリフィスは、団長で、私達の勝利の女神じゃない！」

「それが？」

「それが…だ、だから、そんな何処の馬の骨とも知れない奴を暖めるのになんで私達の女神が肌を汚すの!？」

そんな汚れ仕事は私がやる！

グリフィスの肌を安売りさせるわけにはいかない！」

無表情に見開かれていたグリフィスの瞳に温度が生まれた。

それは冷たい温度だった。

(なんで、なんでそんな目であたしを見るの?!?グリフィス！)

「この鷹の団は、おまえが命令できるの?キヤスカ。

この私に、おまえが命令するといふの?」

「ちっ、違う!私はそんな…そんなつもりじゃ…」

「私がこの男を暖めると、そう決めた。

キヤスカ…あまりわがままを言わないで」

お利口だから、と最後にとびきり暖かな口調で言いながらグリフィスはキヤスカを抱き寄せ、彼女のショート黒髪を撫でる。

すると、それだけでキヤスカは意固地さを捨て去って、ふにやりと和らいでグリフィスのなすがままだった。

「ごめんなさい…グリフィス。

でも、なんであなたがわざわざあんな男を…」

「あの男は、鷹の団に必要な男になる。

私にとって…必要不可欠な…そういう存在になると、そう感じた」

「…それ程なの?」

「私が今までキヤスカに間違った事を言った事がある？」

「……………ない」

「なら信じてほしい。これは…鷹の団の皆のためでもある。

…何より、私を自分でしかした事の責任を取れない女にするつもり？キヤスカ」

グリフィスが悪戯っぽく微笑んで、ギョツとキヤスカを抱くと、褐色の頬がグリフィスの白い服に埋もれた。

白亜の美女と褐色の美女が抱き合う姿は、それだけで一枚の背徳的な絵画のようで、鷹の団の男達に熱い溜息をつかせる。

「…グリフィスが暖めるだけのつもりでも、もしあの男が目覚めて、変な気を起こしたら…」

「私が遅れを取って犯されると？」

「まさかっ！」

キヤスカにとって想像すらしたくない光景。

男に組み敷かれ、男の粗野なモノを突き入れられるグリフィスなど、欠片すら思いたくない。

「何かあったらすぐに声を出しておまえを呼ぶ。

だから、私の天幕の直ぐ側に控えていて、キヤスカ」

「っ、うん！」

すぐ側に控えるという信頼の榮譽を示されて、ようやくキヤスカは微笑む。

だがグリフィスは、表面では暖かに微笑みながらも心では冷たくキヤスカを見下ろしていた。

(…やはり因果はガツツとキヤスカを近づかせようとする、か。

注意を払わなくてはならない。特段の注意を…)

美貌の鷹は、この後に待つ愛しい男との肌の寄せ合いに心を躍らせる。

永い時を待ったのだ。

己を女へと変質させたのも手伝って、グリフィスは今の肉体の芯からグツグツと煮えそうな欲が湧き立つのを自覚し、そしてその熱が心地良い。

(もうオレは…私は、大手を振っておまえの愛をもぎ取れる)  
欲しい物は絶対に手に入れる。  
それだけは、男であつても女であつてもグリフィスのままだつた。

また巡り合うその時

「ガンビーノ………るして、くれ…ガンビーノ………許して…」

悪夢に魘され、ガッツの繊細な心の本音が漏れる。

新鮮な女の死体から零れ落ちるように生まれたという忌むべき事実。

そして、そんな自分を拾い愛してくれたであろう白痴の奴隷女シス……、だが、そんな母と呼ぶべきシスは流行病に罹って顔面が崩れた挙げ句に苦しんで死んだ。

お気に入りの愛妾を失って以来、養父・ガンビーノは、ガッツへ見せたなけなしの愛情も失って心底ガッツを厄介者として扱うようになってしまった。

シスが死んだのは縁起の悪い拾い子・ガッツのせいだ、と。

戦場で片足を失ってからは、より暴虐性に拍車がかかってガッツへの攻撃性が目に見えて増えた。

数年前に銀貨3枚で同性幼児性愛者の変態傭兵に“夜”を売ったのも、他でもないガンビーノであった。

そして、その問答の際にとうとう突発的な事故で養父・ガンビーノを殺してしまい、以降は生まれ育った傭兵団に居られなくなって流浪の日々だ。

それらの何もかもがガッツのトラウマとなっていた。

悪夢から逃れようと意識を覚醒させたがるガッツは、必死になって眠りを振り払う。

目をこじ開けて、体を起こせ。

ガッツの心はそれを望むのに、しかし血を失い過ぎた体は尚も眠りを求めた。

(う…)

だがガッツは無理矢理に瞼を持ち上げた。

重い。

鉛のように重い。

だが遠い意識の中で、自分の体を這い回る蛇のような感触が、ガッツ



ツのトラウマの一つを刺激して、ガッツは悪い夢から醒めたくて眠りに抗う。

(触るな……オレに、触るな……!)

錆びついた鉄の扉の音まで聞こえそうな重みの<sup>薄皮</sup>瞼をようやく持ち上げて、そしてガッツは見た。

(女……?)

悪夢を振り払う為にこじ開けた瞳が見たものは、やはり夢だったらしい。

(水晶みてえな……空みたいな、瞳……こいつは……エルフ?)

まだオレは夢の中だ。

ガッツは確信する。

戦場で育ったガッツは、子供が寝入り時分に聞かされる童話など知らぬが、それでも絵本に出てくる一般的な妖精物語等は知っている。

薄暗い意識の中で見た女はエルフのように美しい。

戦場で見飽きるぐらいに見たレイプされる女子供達のどんな肢体よりもそれは美しく艶めかしかった。

「ガッツ」

薄桃色の唇が己の名を紡ぐ。

(こい、つ……なんで、オレの名を……)

そんな疑問も夢だと思えばすぐに消える。

これは夢だ。

夢だから、それでいい。

「何も考えず……今は眠って……大丈夫。私がいるから」

女は肉の乗った、シミ一つ無い白い太ももをガッツの下腹部に乗せて擦り、女の細い指がガッツの胸板を這う。

「もうおまえを離さない。放さない……。決して……」

女の白い頬が薄紅に火照っている。

(ああ、こいつぁ……やっぱ、夢……だな)

どれだけ肌と肌が触れ合おうとも、銀貨3枚の夜以来……誰にも――

――特に男だが―― 触られるのを嫌ったガッツでさえ、全く嫌悪が湧かない。

おとぎ話の女神様相手なら、ガッツとて多少の融通を利かす程度は、女の温もりに興味はあつたらしい。

その夜、ガッツはもう悪夢を見なかった。



「おまえなんか、あのままグリフィスに殺されちまえば良かったんだ……！」

まどろみから目覚め、随分と若い傭兵共だと驚きながら——自分も少年の域の年齢なのを棚に上げて——彼らの活気ある陣をふらふらと歩くガッツだったが、男だらけの中で目を引いた褐色の女をちよいと眺めていたら突然そんな言葉を投げ掛けられた。

おまけに、その言葉が水気ある唇から飛び出す直前には傷口目掛けてジャブまで打たれた。

(…っ、なんなんだ、あの女っ！)

さすがのガッツも傷みに呻いて蹲っている所に、ガッツと同年代らしき男の爽やかな声がガッツの耳に届く。

「無理もないさ。キャスカのやつは誰よりもうちの団長にぞっこんだからな」

金髪の髪を後ろでまとめた彼は、幾つものナイフを研ぎ、まるでペンを回すかのような気軽さでナイフを弄んでいる。

チラリとガッツを見て、悪戯小僧のような笑みを浮かべながら、プンスカと怒って歩き去る褐色女を指差す。

「それがグリフィスの命令で二日二晩、あんたとグリフィスが添い寝をするのを指を啜えて見てなきやならなかった。血イ流しすぎて冷え切ったあんたの体を温めるためについて言っても…何も団長自らそ

んな事しないでもって、オレでも思ったからな。キャスカの怒りはごもつともさ」

彼が投げた一本のナイフが、水浴びをしていた傭兵の桶に小気味良い音を立てながら突き刺さって、水浴び男は「何てことしやがるジユドオー！」と中々の剣幕で怒っているが、ガッツは興味も無さげに彼らから目をそらし、そしてその人物に吸い込まれた。

キャスカがこちらに罵倒を浴びせる寸前まで、彼女が熱心に話し込んでいた銀髪の女。

そいつがガッツをジツと見ている。

まるでおとぎ話の妖精のような現実離れた美女の目が、ガッツの視線と交わって、ゆっくりとその女がガッツへと寄ってくる。

「今ので目が覚めた…？」

(…空色の、瞳…)

「おまえ、夢の…」

夢の女が目の前にいる。

ガッツは狐につままれたような目でボケつと女に見入ってしまいかけたが、すぐに瞳に力を入れ直して女の視線を受け止めていたが、それは唐突に始まった。

「あなたが欲しい」

銀髪の美女は突然そう言ったのだ。

「…は？」

ガッツが呆気にとられる中、周りの者達は盛大に、そして思い思いに吹き出していた。

遅い朝食を口からぶち撒ける者。戦友との談笑中、友の顔に唾を吹きかけてしまった者。整備している武器の手を滑らして、思わず指を切ってしまう者。ずっこける者。実に様々だ。

「グ、グリフィス!? どうしちやったの!? あいつに何かされたの!? いい、いや、でも…私、きちんと見張ってたし…変なことは…でも見落としたとか…!」

先程の褐色女・キャスカは一目散に走り寄ってきて、グリフィスの肩を揺さぶって正気かを確かめるようだったが、正気を失いかけてい

るのはキヤスカだろう。

ギロリと振り返ったキヤスカの視線がガッツに突き刺さる。

周りの男どもの視線もだ。

ガッツでさえ痛いと感じる程の刺々しい視線の嵐だ。

「お、おまえは誰なんだよ。いきなり変なこと言いやがって…イカれてんのか？」

周囲の視線を跳ね除けながら、ガッツは何とかグリフィスという名前らしい銀髪の女に切り返す。さつき傷口を殴ってくれた女が言ったからグリフィスという名はもう分かった。が、それでもまだ自己紹介はされていない。まずはテメーが名乗れ。そういうガッツの意地だった。

だが、その流麗な銀髪をなびかせる絶世の美女の空色の瞳を見た途端、昨晚の悪夢を振り払った女の肌色の夢をまざまざと思い出して、ガッツは女特有の芳しい何かに飲まれそうになるのも耐えねばならなかった。

「すまない。先走ってしまった…私はグリフィス」

その美女は、まるで子供のように無邪気に笑って、そして先行しすぎた自分を恥じてみせた。

「っ」

それを見て、周囲の団員も、そしてガッツでさえも息が詰まって胸がおかしな鼓動を打った。

妖艶な美女でありながら、その笑顔は屈託のない童女そのもので、そのギャップの破壊力たるや凄まじい。

そこから先は、敢えてグリフィスが忠実にかつてをなぞろうとしたのもあって——ガッツを掻き抱きたい衝動を必死に抑えつつだが——グリフィスにとって涙さえ浮かびそうな懐かしき出会いの再現だった。

（…ガッツ…ガッツ…ガッツ…!!今すぐあなたを、この手で…!!）

思わず伸びる手をぐっと抑えて、グリフィスはガッツと言葉を重ねていく。

余りにも懐かしく、もう一度味わえると思わなかつた極上の味。故郷の味。

母の温もりにも等しい。

父の温かさにも似る。

かつて満月の夜に見た一夜の夢の如く、月下の少年となつてガッツの背によじ登り、キャスカに抱かれたかのような、あの無償の愛。無限の愛。あれこそが永遠。

何も見返りは求められず、ただ愛が己を包み込む、あの安心感。

ガッツが目の前にいる。

ガッツが隣にいる。

ガッツが存在する鷹の団は、まさにグリフィスにとって親の胎内だつた。

ここにはグリフィスが求める全てがある。

気を抜けば、今にもガッツに抱きついてしまいそうだ。

今の自分ならそれが許される。グリフィスは、今、自分が女である事を知っているからその激情を抑えるのも一苦労だつた。

(同じ名でも、かつての延長に在つても、グリフィスはグリフィスでも今の私は女だ。ガッツ、おまえの愛を受け取る資格が私にはある。おまえを独り占めしたつて許される……！)

少しばかり煽つてやれば、やはりガッツは一騎討ちに応じてくれた。

「てめえが勝つたら、兵隊にするなりひん剥くなり好きにしな！」

「……フフ、やはりそう言った……」

そして始まる。

ここから全てが始まつた。二度目の始まり。

ガッツが期待通りに動いてくれると嬉しい。安心する。

そしてガッツが突飛なことをして、己の意に反する事をする、新たな一面を知れて驚かされ、新鮮さを感じ、そしてさらにガッツに惹かれていく。

グリフィスの想いの強さはガッツの全身を焼き尽くさんばかりで、この一騎討ちは男と女の情愛にも等しい夢のひとつときだ。

力を抑えようとしても、ガッツへの想いと共に溢れてきてしまう。  
一瞬、フェムトとしての力が漏れて、その拍子にガッツの大剣が宙を舞った。

「っ!?!」

グリフィスの細剣が、ガッツの大振りを弾いた。

ガアン、という音と共に地に転がった一振りは、中程に深い亀裂すら入る。

「す、すげえー!さすがグリフィスだぜ!」

「あの大剣を…ぶっ飛ばして割っちまいやがった!」

「女の細腕で…!やっぱグリフィスは戦いの女神だ!」

喝采に湧くギャラリーを尻目に、グリフィスとガッツはひたすらに互いの瞳を交差させて、そしてギリイつと歯を食いしばって未だ闘気を衰えさせぬガッツを見た途端、グリフィスは弾けるように跳んだ。

「がっ!?!」

猿のごとく飛びかかれて、ガッツは地に頭と背を打ち付ける。

肺から空気が飛び出て、意識がくわんくわんと僅かに遠のいたが、

(…っ、このヤロウ!!)

ガッツはマウントから繰り出されるであろう拳のラッシュか、或いは止めの剣撃が来るのを予想してガードを固める。

「やっちまえー!」「やれやれー!」「イルの腕とダンの仇だ!殺しちまえグリフィスー!!」

そんな野次が飛び交うが、グリフィスの耳には届いていない。

彼女が見るのはガッツだけ。

彼女の耳に届くのは、ガッツの吐息だけだ。

ガッツを見下ろすグリフィスの頬が赤く紅潮している。

「ぐっ…!」

グリフィスの白い手が、ガッツの腕を掴み、捻り上げる。骨がきしむ。

(お、女のくせに…こんな細い腕のどこに馬鹿力があんだよ!?)

ガードをこじ開けられ、無防備になったガッツの顔。

(来るなら来やがれ!剣だろうが槍だろうが、拳だろうが!まだ口が

あるんだぜ！食いちぎってやらあ！！

獣のように猛り狂うガッツだが、次にグリフィスが繰り出した一手には全く対処出来なかった。

ある意味で完敗だ。

何の抵抗も出来ず、ただ一方的にやられた。

食いちぎってやるという気概すら、べし折られてしまった。

「んむ!!? つつ!!? むうう~~~~~ つつ!!?」

美女の顔が近づいてきて、唇を唇が覆ったのだ。

温かく滑ったものが、自分の中にねじ込まれる。

脈打ち、ぬらぬらと液で濡れ、そして絹以上にきめ細かく柔らかい肉が、ガッツの無骨な歯を舐め、舌を絡め取る。

「っ!!」

ゾワゾワとした痺れが、ガッツの背を這う。

熱く吹き荒れる、怒り以外の火炎のような感覚が、脳天の芯から溢れて、そしてまだ女を知らない童子の一物に、男たらんとする血潮を吹き込む。

ああ、たまらない。

なるほど、男が戦場で女を襲うわけだ。

娼婦という仕事がどこにでも蔓延るわけだ。

こんな女の中に、男の肉を入り込ませて支配したいという衝動。

そしてその衝動を果たす相手の女は、イイ女であればある程、男の熱が膨れ上がる。

ガッツは初めてそういう感覚を理解した。

絵画の中から飛び出したような最上級の女が、自分に跨って、赤い顔で、潤んだ瞳で、舌と舌を唾液で必死に絡ませる。

雄として最高の感覚。

だがガッツはそれに抗おうとする。

戦場で見てきた無様な弱卒と同じように快楽に飲まれて腰を振るのは御免被るし、何より女にどこまでも好きにされるなぞ彼の痩せっぽちのプライドが許さないのだ。

しかし自分を抑え込む女一人程度を、ガッツはどかせずに藻掻くし

か出来ない。

信じられない膂力。

信じられない快樂。

(…っ、オ、オレは…飲み込まれねえ!!)

「がアアアアアっ!!」

「っ!」

ガリ、つと僅かに肉が削がれる。

グリフィスの舌が、ほんの微かにガッツに食いちぎられたが、それでもグリフィスは尚舌を振り込んだ。

熱に染まりつつも、グリフィスの瞳は見開き、ガッツだけを凝視し続けて、とうとうグリフィスを退かす事はガッツには叶わない。

グリフィスは、彼女自身の意志でようやく彼を口づけから解放してやる。

「……私は、欲しいものは絶対に手に入れる」

「…ぐ…て、てめえ……」

今もガッツの胸の上に跨り見下ろしてくる絶世の美女の唇が、唾液と血で汚れ、そして赤と銀の液はガッツとグリフィスの口をねとつく糸で紡ぐ。

「約束だ。…おまえは私のもの……ガッツ」

上下で睨み合う男女。

だが、二人は忘れていないだろうか。

ここが陣のど真ん中である事を。

「…グ、グ…グリフィスが…グリフィスが…キ、キス…した……」

キヤスカががくがくと肩を震わせて、そして今にも泣きそうな顔で決闘を終えた二人を見る。

彼女以外にも概ね同じようなもの。

「…な、なななな!」

「うわあああああ!!!グリフィスがっ!オレたちのグリフィスがっ!!!」

「う、うそだろー!?!?!オレたちの女神が!!!あんな何処の馬の骨かもわかんねえヤローに汚されたあー!?!」



「あの黒髪野郎!!モツをさばいてやる!」

見事で激しい剣の打ち合いに見入っていたギャラリーは、一瞬にして怒れる暴徒になる。

比較的温厚なジュードやピピン、リツケルト達は、衝撃を受けつつも暴徒を必死に宥めようと努力しているが…。

(…しまった。つい…興奮して…)

完璧な女神が、表情を変えずに心でペロリと舌を出す。

彼女は、ガッツが関わりと完璧ではいられなくなる。

それはかつて今も変わらない。

「お、落ち着いて、みんな」

皆の余りにも必死で、血涙まで流してそんな詰め寄りっぷりに、グリフィスですらやや気圧されてたじたじだ。

特にキヤスカがすごい。

「な、なんで…!なんでなのグリフィスうく!あんな奴になんてチューするのよおー!う、ウウわー!」

泣き叫びながらグリフィスの胸をポカポカ叩いてすがりつく。

そんな事をすれば、当然ガッツはキヤスカにも座られて二人分の重量に「ぐえ」と苦しむが、そのおかげで寧ろ暴徒と化した男連中からは守られるのだから皮肉だ。

(…どうしようかしら)

騒ぎまくる鷹の団を見渡して、グリフィスは静かに嘆息する。

しかしその溜息は、どこか幸せな色を含んでいた。

ちなみに、ガッツの身が危ういと察したグリフィスが、彼の保護の為に今晚も自分の部屋にガッツを泊める事を強行宣言した結果、またも鷹の団で一波乱があったのは言うまでもない事だった。